◇講演◇

現代の幼児教育

周郷　博

七年前に亡くなった沖縄生まれの、山之口獏という詩人がいましてね、獏さんは人の話によるとこの私を大変尊敬していたんだそうです。僕の方からみると、僕を一番親しく感じていたということは実感として持っていました。山之口獏は本当に貧乏で質屋通いばかりしていた。「おわい屋が詩をかいているんじゃなくて、詩人がおわい屋も兼ねているんだ」といって、おわい屋もやっていました。僕は、そういう、ぎりぎりのところで人間がもっている衿持（きょうじ）が、大変好きなんです。

獏さんが死ぬ日の午後三時頃、僕は「母と子の詩集」ができたんで、それを持って病院へ行きました。獏さんが、「来い」っていうから行きました。足なんかは、さわったらもう冷たくなって死んでいました。そばへ行って、耳をつけたんだな。そしたら、いっしょうけんめい「ぼくはね、詩人として、きたえた魂で生きてきたんだよ」といいました。それだけいうのが精一杯で、それをいったら、目が上の方へあがってしまいました。獏さんの、この世に残していった、そして僕にいった最後のことばです。

その日、僕は、いなかに用事があって、いなかに行っていて、お月さまをみていました。見ているうちに、電話がかかってきました。今、亡くなりましたって……。その獏さんの詩を最初に読みたいと思います。「座ぶとん」という大変いい詩です。

土の上には床がある
床の上には畳がある
畳の上にあるのが座ぶとんで
その上にあるのが楽という
楽の上には　何にもないのであろうか
どうぞお敷きなさい
どうぞお敷きなさいとすすめられて

楽にすわった寂しさよ
土の世界を、はるかに見下しているように
住みなれぬ世界が寂しいよ

この詩を、僕ほとんど暗記しているんですけども、ゆうべ、またじっと見て考えていますとね、土の世界から人間が、あんまり離れてしまいましたよね。「土の世界をはるかにみおろしているように、住みなれぬ世界が寂しいよ」ということを、獏さんは実に泣きそうな声で朗読したんだけれども、今、僕らにはそういう気持があるでしょうか。この土の世界を、故郷でもいいですけれども大自然でもいいですよね、場合によっては神でもいいですよね、先祖でもいいですよ、「住みなれぬ世界が寂しいよ」――ぼくら、こういう感覚をもっているでしょうか。

子どもだった時分からずっと離れちゃってさ、そして人間の嫌いな公害や何かで汚染したこの世界にお金だけがものをいってるような世界に、住みなれぬ世界が寂しいよ、というふうに言いかえてもいいね。人間が、子どもから仕方なくおとなになるんですけどね、人間が、おとなになることは寂しいことですよ。成長していくことは、得ることだけでなく、失っていくことの方が多いわけですよね。

僕は、このとしになって幼稚園の園長なんかにさせられてね、僕はならなければよかったと思ってますよ。やっぱり子どもの頃の方がいいな、放っておいたって、子どもは成長しますよ、いやらしい、おとなになっちゃうんですよ。ヨーロッパでよくことわざのようにいうけれども、成長するってことは、得ることよりも失うことの方が多いんです。それをね、失ったものには気づかないでね、得るものだけあるようにキョロキョロ探して歩いているんだね。

現代の日本人は、獏さんが「座ぶとんの上にあるのが楽という」といっている。その楽におぼれているのね、楽しか考えていないんだね。そこに、何も疑問を持たないんだね、根があがっちゃってるんだね。

高度成長経済なんて、いい気になってるけどね、僕は地獄のような気がしますね、実体は地獄ですよ。しかし、楽だと思ってる、楽なら何でもいいと思っている。そしてこの獏さんのように「楽にすわった寂しさよ」というふうに感じる人は、ますます少なくなっていますよね、感じてはいるけど、そんなことを感じていたら競争に勝てないと思っているんです。

そこで、まず現代というのは、一体何であるのか、そして現代というのが、どういうものであるのか、一九七〇年代というのはわれわれ日本人にとって何であるのか、そのことについて話をしようと思っています。

最初に三冊の本を紹介したいと思います。一九七〇年代を日本人が考えるために、スウェーデン人や、ドイツ人や、フランス人

が書いてくれたような本です。最初に読んだ本は、ロベール・ギランという人の書いた「第三の大国日本」という本ですね。二冊目に読んだのは、スウェーデン人で、ホーカン・ヘドバーグという人の「日本の挑戦」という本です。そして最後に読んだのは、ドイツ人、ハンス・バーレンフェルトという人が書いた「一億人のアウトサイダー」です。

ロベール・ギランという人は、日本に一番長くいた人で、奥さんは日本人です。スウェーデンの人も奥さんは日本人です。最後に読んだ「一億人のアウトサイダー」を書いたドイツ人は、日本に最もわずかしか滞在していない人ですが、見方は大変おもしろい。何かを考える場合に、この三冊は基本図書だと思います。

そういう大局に立って問題を考えないとね、小さな視野しかもてないね。そしていっしょうけんめいやってるようだけど、みんな人に吸いとられちゃってね、自分のやっていることは無駄だったということになりますからね。大きな視野に立って自分の小さな部分を考えなきゃなりませんよね。

幼児教育に熱心だからということはいいことですけどもね。しかし、その小さな部分で興奮していても、それが全体としてどういう意味があるかね、もっといえば、人類の問題は地獄と宇宙全体のものとして考えなければならないところへ来てしまっているわけですよ。そういう意味では、教育に熱心であることは、その人の良心を信じますけど、それだけでは無駄なことをしていることになるかもしれないということを考えざるを得ないんです。

僕は、最初このロベール・ギランを読んでまして、そうではないかと思っていたことがはっきりしてきましたね。それはね、戦後の日本には、政治家というものはいないということですよ。つまり、世間で政治家とよんでいるのは、企業家たちの番頭さんたちである。現代の日本で、人間らしい親身をもって教育を考えてくれるような政治家はいないということを、まず、われわれは知らなきゃいけない。

ロベール・ギランの本の中で、もうひとつ重要な問題は、日本は経済大国になっていますけど、日本の資本家は蓄積した資本をもっているわけじゃない、国民がたえず、いろいろなものを買ったり、預金したりする、そういうもので資本が成り立っているんです。資本そのものが、大変基礎のないものなんですよ。

第三番目に現代の日本の産業の独特な点は、第三次産業が非常に多いということだね。政府が企業家といっしょになって、大国になろうとしているわけですけど、日本の産業の土台のもろさを現わしているのは、第三次産業、つまり娯楽とか映画、享楽施設、観光事業、デパートが多いことだね。ロベール・ギランは、失業すべきものが一時保っている状態だとみてますよね。

このロベール・ギランの本で、もうひとつ心に残っているのは三冊ともに共通していますが、「政府もそうだけど国民もまた走っていないと負けてしまうという心理をもっているらしい。いつ

でも走っている人が勝つ、別なことばでいえば、進歩ということを信仰しているのかな、何でも、人より先に出ていた方が得だ」といっていることだね。しかも、金にならなきゃいけないんだよね、そういうことがわれわれの、毎日の生活の軸になっているわけですよ。

それが教育というものを競争の場にしてしまいましたよね。テスト、受験という競争の場にしたね。戦後は、みな大学に入るということで大学に入る競争をしてくるわけです。それが幼稚園の方まで荒廃した状態にし、家庭の中まで破壊してしまいました。

このスウェーデン人が書いた「日本の挑戦」では、やはり共通して日本が経済大国になるということは、明治から百年の間に、軍隊を先頭にたてて中国や朝鮮を侵略して軍事的大国になったのと同じように、戦後は経済大国になることを考えたとみている。

しかし、この人は、スウェーデン人ですし経済学をやった人ですからちょっといい方がちがうんです。「経済大国になるためにはすべてのものを犠牲にして、社会福祉なんてものには鼻もひっかけない。水俣病で苦しんでいようがちょっとごあいさつしておけばいい、日本は勝つことばかり考えているけど勝つということがそんなにいいものですか」といっています。

「日本が、経済大国になるのを、世界の人々はうらやんでいるわけじゃない、じゃましようというわけでもないけれど、日本よ幸いあれ、世界は、嫉妬ではなく賛嘆をもってあなたをみつめている。ぜひわれわれの世界の一部になってもらいたい、勝利は最も大切なものではない。いかにゲームをプレーするかの方がはるかに大事なのだ」ということを序文で書いています。

人を追いぬいて勝利を得るというのは僕らの中にあるでしょう。だから、日本国としても、日本人のサイコロジーとして当然あるんだな。なぜ、そう勝ちたいんでしょうね、問題は他に教育の問題も、社会福祉の問題もあるわけでしょう。

このスウェーデンの人も、皮肉みたいですけどね、こう書いています。「私は、二十四歳という青年期に日本に来た。一九六四年から六八年の間スウェーデンですごしたのを除けば、四十歳になって日本を離れ、再びヨーロッパ人に戻るまで日本で暮した。今後二十年の間に私は、日本の欧州舞台への決然たる登場を研究する楽しみを与えられることになるだろう」日本が経済大国としてどんなことをするかだね。

「しかし、私はひとつの夢を抱いている。それは、私の日本人の妻といっしょに、一九九〇年か一九九五年に日本に住みたいという夢である。一九九五年に空は青々としているだろうか。一九九五年までに歩道はできあがっているだろうか」ともかくこれは皮肉なんですけど、日本の自然破壊はえらい速度で進行しているんです。スウェーデンの空なんかとまるっきりちがうんです。

新聞にこういうのが出てたでしょう。イギリスの船会社の人たちが日本を非難しているんだけど、世界じゅうの海を汚している

のは日本のタンカーなんだそうだ。コストを安くあげるために、新しい油を入れる前に古い油を海のどこかにすてちゃうんだって。これは、日本人が自然というものに甘えてる気持があるためなんですよね。自然というのはどんなにひどく汚れたものをすてても、いつか浄化してくれるということは、かつてありましたよ。ところが世界じゅうの海を、日本のタンカーは荒らしているんだね、油だらけにしちゃってるんですよ。この非難は、当然の非難だと思うのです。

今年、イギリス人が大西洋を渡ったでしょ。そしたら、大西洋のどこにも油があるそうだね、あの油も日本人が汚したんじゃないかな。日本人というのは、自分のことは考えるけど、何かに甘えていて社会全体的なものを持ちあわせていない人間ですね。海を汚しているのもそうだし、国内をみてごらんなさい、ゴミや何かをすててる、すて方をみてごらんなさい、あれもやっぱり同じものですよ。一歩外へ出たらどんなにきたなくてもいいんだ。社会全体的な気持がまったくないんだね。

このスウェーデンの人が書いてますけど、ベトナム戦争でもうけていたのは日本だけだそうだよ。アメリカだって損しちゃいましたね。それに国連に加盟している国だって、いい悪いは別として、兵隊を派遣したりして犠牲をはらっているわけですよね。日本だけは、ちゃっかりともうけていたんです。僕、これ恥ずかしいな。しかし、これはベトナムの問題だけじゃないんですよ、国内で同じようなことやってる人がいるんですよ、ちゃっかり金もうけやってるんだね。

今度は、「一億人のアウトサイダー」っていう本ね、最後の方に教育とかなんとか大変おもしろい問題があるんです。教育勅語なんていうのはね、ヒットラーの「わが闘争」みたいな激しいことは書いていないのにそれをなぜ占領軍が禁止しなければならなかったか、あのくらいのことは普通のことだっていっているんですよ。しかし、日本人は、特殊な人種でね、言外に変な民族だそうだね。そういう意味では、やっぱり危険かもしれないんだね、教育勅語も。

日本人は、ことばというものに酔う性質をもっているそうだね。戦争中は「大東亜共栄圏」とかね「八紘一宇」とかいうことばがあって、こういうことばは日本人にとって魔術的な作用をもっているので禁止されたんだそうだけれども、戦後は「平和」と「民主主義」だね。

〝天皇制がなくなって、今やそういうことばは、役目をおえたお守り札が片づけられたのと同じように、わきへ片づけられてしまった。天皇制イデオロギーの崩壊以後、日本人の心の中の空洞ができて、さらにその空洞は、ことばのおまじないみたいなものを必要とした〟わけよね。戦争に負けてからは、西洋製の思想的まじない、ことば、ベールをかけられたような、そういうことばが必要になってきたんだね。それが、平和とか民主主義とかいう

ことばなんだね。

〝平和とか民主主義とかいう概念が口にされるのも、何よりもそれが人気があってよく広まっているからであって、その世界観としての内容を強く信じているからではない〟んだ。だから平和とか民主主義とかいうものを、ことばのおまじないとして、うまく利用はしていくんですけどもね、しかし、それはいったい何であるか、本体をつきつめようという気はないんだね。そこにすでに危険が顔を出しているわけですよね。

この人がいってるように、〝もう、こうしたことばが、いつの日か自らによせられている期待を満たさなかったり、いざという時に効き目が弱いということになれば、人を幻滅させた戦争中のお守り札と同じように、頭の中からぬぐい去られてしまうこともあり得ることだろう〟平和とか民主主義とか本当に考えてそういってるんじゃないんですからね、そんなものは、すぐすてちゃうだろうという警告をここでしていますよね。その危険は、僕は十分にあるだろうと思いますね。平和とか民主主義なんて役に立たないというふうに、すぐにいなおる危険性を、日本人は十分に持っていますよ。そしてまた、いなおらなければならない状態に、今、来ているんです。日本人は、何かそういう平和とかなんとかいうことばを、ずっといっていると、平和になってくるような気になるんだそうだね。たばこの中で、ピースとホープがよく売れたそうだ。平和とか希望とか唱えていると、来るような気がしているんだそうだ。これは、日本人が、ことばというものの実体を本気で考えようとしているんじゃなくて、おまじないに使ってるんですよ。

経済大国になるということで、公害問題は、まさに救い難いほど、この美しい日本の自然を破壊しています。ジェット機をひとつ飛ばしただけで、空気が高層でうんと汚れてしまうわけですよね。しかし、空気が汚れたり、水が汚れてしまったりするのと同じような速度で、人間の心というものが汚染してしまっている、どんどん汚染していくわけですよね。これも、恐しいものだと思うんだね、どんなに経済大国になってみても。しかも経済大国は今や、非常にあやしくなってきましたよ。ここのところが、このドイツ人が書いている最後の部分で、中国との関係なんですよね。

〝佐藤栄作が、わざわざサイゴンに立ち寄ったことは、アジア歴訪のクライマックスとして多くの注目をあびた。それは、あらゆる側から、たえず批判されているサイゴン政権にとって、精神的な背面援護を意味した。アメリカと同盟関係にある西ヨーロッパのどんな政治家も、このような援護をあえてしたことは、いまだかつてなかった〟これにはね、中国で原爆ができたんでね、日本も原爆を持たなければならないと書いてある。彼の考えでは東南アジアというものを、中国といっしょに争って、東南アジアを支配圏におこうというのが腹で、ヨーロッパの政治家ならやれないことを、佐藤栄作はやったというふうに、ここに書いてあるわ

けです。

これは、この人の見方なんですけれども、〃日本の政府首班は、北ベトナム爆撃の無条件停止に反対であると発言し、ジョンソン大統領とタカ派陣営に身を投じた。日本は、突然アデナウワー・ダレス時代のドイツに劣らないほど、ワシントンに対して、忠誠になったように見えた〃僕は、こういう危険をおかしても、この高度経済成長を保たしていかなければならないような条件も、あるんだと思うんです。つまり、日本の経済がいつガタンときてしまうかわからないわけですよ。だから僕はやっぱり、日本の政治家というのは、大変なんだと思うんです。

そして、この人は、むしろ学生運動をやっている人たちに対して、同情的な態度をとって書いているんですよ。日本の現在の社会体制と政府決定の責任をもっている政府というものを非難することは簡単ですけどね、問題はそんなに簡単ではなくて、われわれもまた、同罪なんだと思いますね。日本の経済が、大変危険なところへ来ていることも、僕は確かだと思います。

七億の中国人と、一億人の日本人とがいて、七億の中国人の生き方と、一億の日本人の生き方とがあるわけですけども、〃日本人は、国家公務員的であり、プロシャ的であり、軍人的であり、いわば士官候補生的である。中国人は、放浪者的であり、ナポリ人的であり、人民的であり、いわば下士官的である〃〃日本人は、まじめで、仮面をかぶっており、胃かいようになりやすい〃だいたい、日本人は、まじめだけど、仮面をかぶってるよね、胃かいようになりやすいということは、すぐ腹がたっちゃうことですよ。理性を失いやすいんですよね。〃日本人は、熱狂的な意志の人で、七億の中国人は、忍容の人である〃この、熱狂的な意志ね、これは、確かに、日本人にあると思うんだ。景気がいい、景気をつけるなんてね。〃中国人は忍容の人である。その微笑の生活のちえで、彼らは世界で大きな同情をうけるのに対し、日本人は、ドイツ人と同様に驚嘆はされるが愛されない〃これは、僕、確かにあると思うな。

一番、最後のことばですけれども、日本人は、今、経済的にもどっちの道を行ったらいいのかわからない。経済的には、世界からきらわれているんです。そしてね、アジア人にもなれないんだね、中国はアジア人としての道を進んでいるというんです。日本人は東洋と西洋の両方をとり入れていかなければならないんだね。〃だから、自分自身で、あれかこれかと決められないことは、いぜんとして、その宿命である〃つまり、中国の七億の人の動き方とはちがうんですね、自分で決められないんですよ。世界の中の日本として生きていくよりしようがないんだね。〃日本のように、はじめから孤独を宣言されている国は、ほとんど他にはない〃孤独な国ですよ。そして、この孤独な国の中の人間であればなおさら愛される日本にしなければならないよね。そして孤独でなく、世界と共存していける資格を、日本は持たなければなら

ないわけです。

そういうところに教育というものがあるはずなんですけども、ロベール・ギランやその他の人も書いているように、日本の教育を本当に考えている人はいないんです。日本にそういう政治家はいなくて行政官しかいない。それでは、誰が教育を考えなければならないんでしょうか。一九七〇年代に、国民がここで教育という問題を、本気になって考えていかなければならないと思うんです。

この三冊の本は、日本というものを、フランス人、スウェーデン人、ドイツ人に理解させるために書かれた本ですが、一九七〇年代の日本が、どの道を選ぶべきかということを、われわれに教えてくれている本だと思います。

人間は、ことばというものを持っているわけです。そのことばによって、人間は人間となっているわけですから、ことばがこのくらいにごってきてしまうと、ことばは今や、生命を失っているわけです。われわれは、人間である限り、この肉体の中に、ことばが宿っていなければならない。そうでなければ、肉体はもたないわけです。

個人の肉体がそうであるばかりでなく、社会の中の物質的なものも、ことばが宿ることによって、その物質が人間の精神を支えることになるわけですが、現在は、物質によって精神が破壊されています。

今の日本の教育は、教育制度ということで、教育であるような顔をしていますけれども、これは、もはや教育ではないんです。現代の大学なんていうのはね、やめてしまって公園にでもした方がいいと僕は思いますよ。

モンテッソリーが、精薄の子どもの教育をやっているうちに、ふつうの子どもの教育はまちがっているということがわかってきた。そして、イタリーで迫害をうけ、インドへやってきてタゴールと親しくなるわけですよね。日本の教育の制度は、明治からずっと作られたものを、敗戦によって急に変えましたけど、日本人は、本当に考えて変えたんじゃないんだ。おまじないみたいなもので変えたんだね。実体は、朝鮮戦争を契機として、あらゆる犠牲を国民にかけても、経済大国になるという道を選んだのです。大変危険な橋の上にのっかっている状態の中で教育というものを根本的に考えなおさなきゃいけないんです。

矢沢宰(おさむ)君の「光る砂漠」という詩集があります。

矢沢君というのは、四年前に二十一歳で死んでしまった人です。彼の詩や日記を読んで、八十七歳の内藤濯先生が大変興奮して、〝君は、えらい問題をしょっている。僕は、十数年前、「星の王子さま」とめぐりあったんだけれど、「星の王子さま」と共通した大きな問題にぶつかっているんだ〟というふうに僕のところへ電話してくるんです。僕はああいうとしをとった人とか貧乏で世間から無視されそうな人、えらい人よりもそういう人と関係がついてくるんだね、世間的には不幸だといわれている人とね。

矢沢君のお母さんも〝死んだ宰が、先生のような人にみてもらいなさいといっているような気がして〟詩を僕のところへ送ったんだというんです。どうも僕は、子どもの時から、そういう運命をせおってきているような気がします。

今の教育というのは、全体として形だけはあるけれども精神はなくなっちゃったわけね。それは、経済成長というものの中でやっと維持されているというものですよ。教育の制度全体が七〇年代に役割を果たすことのできるものではないんです。制度として認められている教育ではないところで、本当の教育がおこっているということを感じます。

ルソーでも、ペスタロッチでも、フレーベルでもそうですよ。今や、世の中があまりひらけちゃって、できあがってしまっているものは生命を失っているわけですから、こういう時代に、本当の教育は人の気がつかないところで、始まっているんだということを感じます。矢沢君の詩と日記は、こういうことを語っていると思います。

矢沢君は、八歳の時から腎臓結核で、ひとつ腎臓をとってしまいました。おじいさんとおばあさんが農業の仕事をしているんですけど、お父さんはやはり結核なんだな、家は貧乏で、お母さんが一人で暮しをたてていたのですけれどね。そして十三歳まで小学校にいますが、小学校の五年生までしか行っていないで、一年おくれて形だけ卒業するのです。その時は、もうひとつの腎臓もひどくなってしまっていて結核病院にかつぎこまれるのです。

小学校五年生しかいっていないのに、どうしてあんなにきれいなことばが出てくるのか驚くべきことだね。それは、生まれつきというふうに考えたってその解釈にはならない。環境かといって環境でもその説明にはならないんです。きのう自動車の中で内藤先生はうまい説明をしましたが〝矢沢君は、自分の心の中に学校をもっていたんじゃないだろうか、生まれたときからずっと、心の中に学校をもっていたんじゃないだろうか〟そういうふうに考えるより仕方がない。

ところが、今、ふつうの子どもたちが育つ環境はどうですか。そもそも、家庭で、一人の人間になる初期の教育、たしなみという意味の教養がなされないで、人がかりでしょ、あそこの幼稚園に入れればいいとか、あそこの小学校がいいとかね。人がかりにしている所は、教育なんてない所なんです、入ってれば入ってるほどよくないんです。

それまで、寝たきりでしたけど、矢沢君は十七歳の時から立てるようになりましてね、病院の中に付設されてある中学部に入って、手押車で行って、いっしょうけんめい勉強しようと思いました。そして二年で中学校を卒業して試験をうけて高等学校へ入るんです。ちょうどその頃に体の具合がたまたま少しいい具合になってくるんです。それで退院して一年半、高校へ通うんです。学校へ行くようになったら勉強がおもしろくなくなっちゃうんで

す。矢沢君の日記がここにありますけど、学校というところへ入ると、勉強する気があんまりなくなってくるのね。それをね、今、幼稚園からそういうふうに、あおっているんですね。

これは、どういうことでしょうか。学校というところは、本当に勉強しようとする気持をこわしてしまうところなんですよ、知識に対する発見と、おどろきをなくしてしまうところですよ。

お金というものも、そういう心を人間の心から失わしてしまうものです。何不自由なく暮らしていたりするということが、まちがっているんですね。貧乏の方がいいんです。貧乏で、生きるという重荷をまるごと自分にひきうけている方が、勉強するという気持がおこってくるんですよ。

八十七歳の内藤先生は、「光る砂漠」を読んでまして、非常に感激しましてね、先生自身が、矢沢君をたたえる詩をかいたんです。これが、実に若いんです。内藤先生は、「星の王子さま」と共通している部分をこの詩に感じたらしいんです。

これは矢沢君の十五歳の時の詩なんですけど、

おれの中に　もう一人　すばらしい　人間がいて…
そいつと　しっかり　手をむすんで
生きて　行きたい

おれの中に、もう一人すばらしい人間がいてだね、それが、サン・テグデュベリにとっては、砂漠で会った星から来た王子さまが自分の中にいるもう一人の自分なんですね。だから、自分の中で対話しているわけです。しかし、十五歳の、小学校五年しか行かない子がね、そして貧乏で病気で、不幸な少年が、どうしてこういういいことばをいえるんでしょうかね。

この本では、その前に、「ぼくから」という詩を出しています。彼は、その前には死んだ方が楽だと思っていましたけれどね、十五歳になって生きたいと思うようになりましたよね。たとえ、わずかな時間しか生きられないとしてもね、十五歳になって生きていることには、何かがあるはずであると、心がかわってくるわけですよ。その時の矢沢君の決心をかいたのが、この「ぼくから」という詩なんです。

僕から　イエス様を　とり去れば　僕は灰になる
僕から　詩を　とり去れば　僕は灰になる

死んじゃうなんていわないところがいいでしょ。十三歳の時の十二月二十四日に、イギリスの宣教師が病院に来てるわけですよね。その頃に、彼は初めて生きたいと思うようになるんです。この詩は、彼の生きることについての、宣言なんです。イエスさまにすがりつきたいという気持が一方にありますね。もうひとつ、自分の責任を出してくるわけです。〝僕から、詩をとり去れば灰

になる〃というのを、あわせていってるんだよね。詩というのは、自分でかくものです、人間がやるべきことを自分の責任として出しているわけだよね。

十四歳の頃、一人でねたっきりで、鏡でしか外をみれないんです。そして、いつ死ぬかもわからないという、十字架にかけられどおしで生きてるわけよね。誰も来てはくれないわけでしょ。その当時にかいた詩を読むとね、僕は今でも涙が出る。「感謝」という詩があります。

とにかく素晴らしい夜だった
ガラス窓に
春の淡い月の光が射しこみ
どこか遠くで
九時を知らせるオルゴールも
鳴っていた
これだけで僕は満足した
細い指をしっかり組んで
深く深く神に感謝した
熱い涙が耳たぶをつたって
枕の上にポトリと落ちた時
僕はがんばるぞ！　と思った

十四歳なんていう年齢はね、こういう決意をすることのできる年齢ですよね。そして、この次に「春の夜の窓はあけて」というのがありましてね。

電気はつけないことにしよう
窓は開けておくことにして
春の夜の清く甘ずっぱいような香りを
部屋の中いっぱいにしよう
そして俺は
静かに神様とお話をしよう

この頃は、神さまということで彼の命はもっているわけですよ。これは、さっきいった、平和とか民主主義とはちがうんですね、この時に矢沢君がいっている神さま、「俺は　静かに神様とお話をしよう」といっている時の神さまはね、そんな、ちゃちなことばじゃないんです。

「早春」というのがあるんですが、これは十五歳になった年の五月にかいたものです。人間が生きるという決意をした時は、本当に危機というものがあるから、生きる、生というものが張りをもってくるわけですよね。一度、死をくぐってこない生なんて汚れる一方ですよ。

人は何度も死ななきゃいけないと思うんです。その時には、自

然がふつうの人の目でみるのとはちがってくるんです。ふってくるように、美というのがわかってくるのよね。この「早春」という詩を、はじめて読んだ時、驚きました。僕ら、みんなこういう経験しているはずなんだけどね、見えない人には見えないんです。見えたところでことばにはならないんですよ。

雀の声のかわったような
青い空がかすむような
ああ土のにおいがかぎたい
その春にほおずりしたい
何を求めていいのやら
ああ土の上を転げまわりたい
きっとしまっているような
淡い眠りの中の夢のような
生きなければいけないけれど
何だか死んでもいいような
去年の春女がくれた山桜
まぶたの中に浮かぶような

この矢沢君には模倣がないでしょ。この秘密はどこからくるんでしょうかね。心の中に学校をもっていたんだといういい方でしかいいようがないよね、どこかで学んだわけじゃないんですよ。

そして、もっと前の十四歳頃に「あきらめ」という短かい詩をかいています。僕は、日本国民がいっしょにこういう決意をしなければいけないと思うのです。

あきらめてはならぬものを
あきらめて
あきらめてよいものを
あきらめず
こんなのがわたしの
なやみのたねになっているのでしょうか？

この頃に、矢沢君は、生きるという決意を本当に純粋な形でしますよ。わずかしか生きられないにしても、生きるということは意味のあることだという。そこで、生きるということは、あきらめちゃいけないということを、自分にむかっていっているわけですね。

日本国も、こういう決意をするべきじゃないでしょうか、あれも欲しい、これも欲しいじゃ、何もできないんです。何かあきらめなければ他の問題がはっきりしてこないわけですよね。経済成長も欲しいし、平和も欲しいなんてわけにはいきませんよ。お金も欲しいし、人間としての気高さも欲しいなんていったってそうはいかないよね。この矢沢君の詩は、僕らにむかって全体に語っ

ているような気がするんですけどね。僕らの気持は、汚れちゃってますよ。その汚れを払いのけなければやるべきことがはっきりしてこないわけです。

この本では、最初に「ききょう」という詩が出してあります。

おまえは　本当に健康そうだね
つぼみは　ちょっとさわれば
はじけそうだね

こういうのが、初期の詩です。おそらく、この「ききょう」という詩をかいた頃だと思ますが、その頃いた看護婦さんが、新潟のいなかで生まれた十八歳の代用看護婦で、三月に矢沢君が病院にかつぎこまれてから、十二月まで、誰からもかえりみられない少年、矢沢君の世話をするわけです。

歌をうたってくれることもある。それからクローバーの花をつんできてくれたこともあるんだね、何でもないことなんですけどね。それから、矢沢君がかいた詩をほめてくれたんだね。そういうことで、死の彷徨までどんどんひきずりこまれていた彼は、生きようと決意をしてくるのですよ。したがって矢沢君は、ずっとこの看護婦さんというものを、天使さまのように美しくみるようになってくるのです。

この人は十二月から、病棟が変わっちゃって、矢沢君はもう会えないんです。その年の十一月三日から、この看護婦さんに読んでもらうために死ぬまで日記をかきますよね。

その日記の文章は、実に死ぬまでいいんです。そして、人間が考えるべきパスカルの観点に似たような問題を、ほとんど全部考えている。文章も非常にいいんだな。どうしてこうなったかという最後的説明はつけられませんよ。

若いから、あこがれて高校というところへ入りましたけど、入ったあと学校というものは、つまらないものだということをかいていますね。矢沢君という少年の、二十一年間の生涯の中で、現代の学校というものが批判されていると思います。

その頃の看護婦さんの思い出と関係があるのだと思うんですが、「あなたの手は」という詩があります。

あなたの手は
握りしめるとあたたかくなる手だ
あなたの手は
あたためるとひよこが生まれる手だ

われわれは、そういう手になり得るでしょうか。ジャン・ジャック・ルソーも二百年前にかいていますけど、子どもが、一生涯を決定する場合、どういう女性とめぐりあったかということによっ

て、人生の針路がかわってくるわけですね。そういう女性が必要ですよね。ゲーテのようないい方で、永遠の女性といってもいいね。そういう女性が今いるでしょうかね。こういう手をもった女性がいるでしょうか、そういうお母さんがいるでしょうか。短い詩ですけれど、幼児教育の中核になるものをいっていると思います。

人間が人間になるために、女性はいかなる役割をするんだろうかということをいってると思います。女性でなくても、日本の総理大臣でも、文部大臣でもいいよね。そういう手をもっていて欲しいなと思いますよね。

それから短かい詩に「まよい」というのがあります。

さわると手のきれるようないとを
心のなかにはって　まよいをくいとめたい

十六歳の少年が、こういう詩をかいているんだね、矢沢君は十六歳、子どもの頃にこういう糸をもつことはできますね、小さい時に、まよいどおしでおとなになっちゃうんですね。幼ない時代に、こういう手の切れるような糸を心の中に張ることがあっていいわけじゃない。つまり意志決定というものにはね、誰かの暗示でもって、あるいはいい環境の中で幼い時代にこういう糸を張る必要がありますよね。

僕は、教育の出発点は、意志の教育だと思います。意志というものはないんだね、迷いだけでいいんだね、そういうような教育を今やっているでしょうか。初期に、日本の子どもは、何ものにも inspire されることなしに、おとなという怪物になってしまうんだ。肉体だけで、乱雑な迷いのかたまりなんですよね、欲のかたまりです。だから、早くおとなになっちゃうね。「子どもは、人間として成長、成熟するひまもなく社会という怪物のえじきにされてしまう」と、ある日、僕はここに書いてますけど、現代の日本の社会を考えたらそうですね。子どもに人間として、成長、成熟するひま、余地を与えてほしいんですよね。そういうひまもなく、社会という怪物のえじきにされてしまうんです。現在は、社会について、こましゃくれた意見や知識をふりまわす前に、人間は人間にならなければいけないんですよね。

今、新潟で洋服屋をやっている、いっしょに病院に入っていて彼の大変親しい親友になっていた人と二人で話したことが、次の長い詩になっています。僕らもこの矢沢君の詩によって教えられているのだと思いますけどね。二人で話したことです。

これから　どうなるんだろう？
二人でベッドに　ねそべりながら考える
高校へ行きたい
俺達は何もできないから

勉強をやっておいたほうがいい
でも家がびんぼうでなあ……
商売をやりたい
しかしこんな体ではなあ……
結論はなるようになるだろう?……
そしたらそうなった所で
一生懸命やろうと
言う事だった

未来に対して　夢はあるよ
何かは出来ると思う
これまで生きてこられたことは
神が俺達に何か役にたたせようと
思っての事かもしれないから

そうかんがえれば俺達はなんの力もないようだが
どうにかして生きていけないこともないように
思うなあ

僕は、この中で「そしたら、そうなった所で一生懸命やろうと言うことだった」というところは非常によくわかるんですけどね。初めから東大へ入ろうとかさ、人よりも先に走ってた方がいいとか、はじめから未来をしばっておいちゃいけないんですよ。未来は解放しておかなければいけないんですよ。「そしたら、そうなった所で一生懸命やろう」という十六歳の二人の少年の心は実に美しいと思いますよ。

いつどうなるかわからないという点では、日本の社会は、病気で死にかけている矢沢君の体に似ていますよ。だから、こういう時代に僕らがもっとお互いに、本当の意味で愛しあわなければいけないですよね。ところが愛なんてものは、どこかへ行ってしまってないですよ、SEXしか。こういう時代こそ愛というものが本当に求められているんだと思うな。愛の神秘というものを発揮すべきですよ。矢沢君は、それをこの詩でかいています。

これから人間がどうやって生きていかなければならないかということは、日本人だけの問題ではなくて、人類全体の問題なんですけどね。ここに、テアード・シャルダンのことばがあります。この地球の上で人間は、どのような生き方をしなければならないかということで、一九六九年にドゴールが、シベリアのアカデムポロロというところへいった時引用しているのです。〝人間が生まれたこの命を、おしみなく与えることのできるものは、それは物を所有することよりも、本当に知るということと、生きるということのふたつです〟

われわれは、生きるということを、もうけてたくさんの物を所有するということとすりかえちゃっていますけどね、今や、人類

は植民地をとることとか、金もうけをするというような所有することよりも、本当にものがわかってくる、自然の美しさがわかってくる、宇宙の大きさがわかってくる、人の心というものも、小鳥の声の美しさもわかってくることの方が大切なんです。

幼児教育とか、これからの教育を考える時、本当に知るということは何でしょうか。知るということは、ものをたべることよりも、もっとはりあいのあることでしょ。発見のおどろきがあるわけでしょ。知るということと、生きるということが、所有すること以上に、人間にとって生きがいでなきゃならないような時代が来なければ地球は滅びちゃうんです。

そういうことを、幼児の時期に、どういうふうにして教えることができるでしょうか。

現実には、日本の社会は、金があれば何でもできる。こんなに店があって、子どものごきげんとって、子どもからまきあげている国はないですよね、小さい時から、金があれば何でもできる。そして食うことばかり考えていて、水も飲まない。ジュースじゃなきゃ飲まない子がいて、それを鼻にかけているお母さんもいるんだね。そんなのちっともえらくないよ。

テアード・シャルダンのことばですけど、〝生まれた命を、おしみなく与えることのできるものは、これから地球上において所有することよりも、むしろ、本当に知る喜びと、生きている喜びでなければならない〟

そういう、人間の未来に、日本の子どもたちが参加していけるような幼児教育にしてみたいのです。

僕は、幼稚園の園長になって、幼児の問題を考えているうちに、日本の社会のまちがいがいろいろわかってきたし、大学やなんかの教育のどこがまちがっているかということも、大学の中にいたらわからないことがわかってきました。

こういう、大きな変革の時代ですから、こういう時代に幼児の問題を考えている人だけが、社会のまちがいと、未来の出口がふさがっている状態が、本当に、わかると思います。どっかの徒党に属して、はいりこんでいる人には、それが見えないんですよね。

だから僕はつらいんですよ、何か考えたって僕の思うようにはできませんし、ヤギをつれてくれば公害で死んでしまうし、失敗の連続なんで、幼稚園の園長としては、先が見えてきました。私が幼稚園の園長をやっている限り、ぼくは苦しいだけであって、決して成功はしないだろう。失敗で終わるだろう。しかし、失敗ということは本当に戦った人だけがわかるんだね、戦わない人に失敗は、あるわけはないんですから。そういうふうに、私は今、考えています。

（一九七〇年七月二十五日　お茶の水女子大学日本幼稚園協会主催　幼児教育講習会での講演より）